研究者としての女性の立場から

なぜ化学を選んだか

大阪工業技術試験所*
高　橋　高　子

数日前，編集委員長の堤教授からお電話いただいた．女性の化学者と云う立場から何か書いて下さいとのこと，先生お自らの〝お願い〟に恐縮のあまり消え入りそうな声で「はい」と返事してしまった．「女性化学者」，それ以後数日間，この立派な，そして考えれば考えるほど奇妙になってくる言葉に悩まされている．女性であることには間違いない．しかし化学者だろうか．新制大学を卒業して十年，途中一年半ほど工学部の研究室に在った間も含めて，私の仕事はたしかに絶えず白い実験着を着て薬品やガラス器具や実験装置に囲まれた所に存在した．だが学位も肩書きも無し，世に知られた業績も無し，弟子も無し，著書も無し，どうもいわゆる学者と云うイメージには合わないような気がする．もし男性がこれと同じ状態にあるなら，その彼を化学者と呼ぶかしらと思う．これはどうやら女性である故にこの程度で化学者と云われ，こうした随想文を依頼される光栄に浴したのであろう．

過去においてもまた現在でも，非常に優れた女性の物理学者或るいは化学者が世界に数多くあるし，日本人の中でもこの方面で活躍されている女性の先輩の方のお名前を幾人もお聞きしている．しかし不幸にして個人的に知っている方が一人も無い．もっと範囲を広め，何々長と云う地位を持った女性，何々女史と云われるような人，世間によく名の知られた女性，つまり社会的に立派な仕事をしている人々をも親しい知人の中に持たないので，残念ながらそう云う人達の考え方などを知る機会があまり無い．しかし，如何に表現されようと結局は男性中心，男性優位で構成されている社会の現定の中にあって男性と同じ仕事をし，一方では女性であることをやめるわけにもいかない立場にあって，それを悩み，それを割り切って来た過程は，スケールの大小こそあれ共通のものがあるだろう．また特に化学の研究にたずさわっている者の数はまだまだ少ないことから，やはり一種の特殊なケースとして見られ，このような表題の拙文が活字とするに足る値打ちがあると認められるのだろう．従って，平凡ではあるけれども〝女性化学者〟の一人として，また職業婦人の仲間の一人として日頃考えていることを思いつくままに書いて見ようと思う．

☆　☆　☆

現在，女性がたずさわっている仕事の種類はずいぶん多いだろう．漁船の船長，山のガイド，競馬の騎手等，こんなことまでと驚かされるような仕事をしている人達を見聞したり，ソ連や中国の様子を聞いたりすると，男性のする仕事はすべて女性もしているのかもしれないとさえ思う．漫然と考えて見て，これらの中で女性であると云うことが重要な意義を持つ仕事としては俳優，歌手，舞踊家の芸能人関係，サービスを提供する各種の仕事．女性が男性とは異なったセンスを活用出来る仕事としては作家，画家，音楽家等芸術関係，アナウンサー，記者等マスコミ関係，各種のデザイナーの仕事．女性が受け持つ方がよさそうな仕事としては看護婦，保母，お手伝いさん，美容師，洋裁師，店員等々．今思い浮かばなかった仕事のほとんどは，〝化学を研究する仕事〟も含めて，強いて女性でなくてもよいと云うことになろうか．もちろん女性の能力が特に発揮される仕事もこの中にはあるだろう．

ではいったい化学を研究すると云う仕事に，女性の能力を発揮する場があるだろうか．それより前に，このよく使い古された「女性の能力」と云う言葉が大変な曲だと思う．感受性，耐久力，環境に順ずる力，そう云うものの強さを云うらしいが，実際に比較してみて私も含めて周囲の女性が周囲の男性より特に優れているとは断定し難い．一般的に女性の方が手先の仕事が器用であるが，化学の研究の本質とは関係の無いことである．また，一般的に女性の方がきれい好き，整頓好きで，これは悪いことではないが，そのため絶えず掃除役をし，集会があれば後始末を引き受けるはめに落ち入る．またそう云う雑事が男性より向いていると云うので，電話が鳴れば人より先にかけつけ，来客の際にはお茶を出し，中には研究室の食事の仕度までしている場合がある．つまり女性の能力の発揮とはこのような職場の潤滑剤，職場の花的存在になることを指すようだ．化学の研究そのものとは無縁の所に在る．

* 池田市緑丘1丁目，第二部

化学の研究，ひいては真理の追求なるものの前には，所詮は発揮すべき女性の能力など格別なもののあろうはずは無かろうと思われる．

☆　☆　☆

私の勤めている試験所は五つの研究部門と，その他に庶務課，企画課などの事務関係の部門がある．大ざっぱに種類分けして，第一部は無機化学，私の所属している第二部は高分子化学を主とする有機化学，第三部は機械光学，電気等物理関係，第四部はガラス，耐火物等，第五部は分析化学，試薬研究等の研究部門である．このうち女子職員の最も多いのが，事務所を除いては第二部で二割近く占めている．二部は有機化学だからやっぱり女の人が多い，と何となく皆思っている．しかし他の部門と較べて多くなければならないはっきりした理由は無いだろう．採用する側が意識的に女子研究員を多く入れたのでなければ，単にこの部門に女子の希望者がより多くいたと云うだけのことだろう．

最近でこそあまり人に聞かれなくなったが（それほどめずらしくなくなったからか），以前はよく「何故化学の勉強をする気になったのですか」とまじめに聞かれたものである．そんな時，相手がまじめであるほど返事に困った．自分の行く手の方向を定める時期と云うのが，大学へ進学する時の学部を決める高校の二～三年生．どんな立派なことを考えたとて，わずか十七～八才の考えである．その時どの学科が一番好きであったかとか，親の意見とか，友達が行くからとか，そんな程度の理由ではないかと思う．私の場合，或る時期には国語が得意だったから文学部にしようと思い，或る時期には医学部に行こうとしていたし，また別の時期には外国語の勉強が面白いから外語大へ進もうと考えていた．工学部へ入ったのは受験勉強を始めた頃たまたま化学が好きだったからである．当時はまだ阪大は受験の際に学部だけ決めればよかったが，この頃ではさらに学部内の科まで志望して入学するようだ．その時選んだものが一生の仕事としてついてまわると云うのに，いったいどのようにして撰択するのだろうかと心配にさえなって来る．

結局，化学を選んだ理由はただその当時好きだったと云う以外に何も無いのである．好きになった理由も，多分化学の生先がやさしく，感じよく，授業が楽しかったと云う程度のことだったろう．広い化学の分野の中で現在のような一つの限られた分野の仕事を選んでいるのも，同様にさしたる理由もなく自然にこうなっただけ，と云ってはあまりに情けないと思われるだろうか．しかし男性の研究者に対しては，わざわざ「何故大学へ入ったのですか」，「何故化学を研究しているのですか」と質問し，その理由を深刻に説明させる者はいないだろうに，女性はその理由の説明に心る悩ませられる機会がままあると云うのが現状である．

自分の例からだけで全体をおしはかるのはどうかと思うが，化学，特に有機化学に女性の研究員が多いのは，この学問が何となく女性に好かれる性質を持っているかららしい．決して女でも出来る学問だと思われているわけではない．

☆　☆　☆

私が卒業後すぐ就職した所は民間会社で，いっしょに入った全く同で学歴を持つ男の人達とかなりの給料差をつけられた．ボーナスはさらに本俸にかける率に差がついたから，手取りは半額ほどだった．またお茶汲み当番，お掃除当番と云うのがあって，これは女子だけが担当した．仕事の内容は同等だったし，入社当初から仕事の能力に差が現われるわけでもなし，この歴然たる待遇差は性別だけによるものであった．もちろんそう云う現象が社会一般のことであることは知っていたが，実際に自分がそのような待遇を受ける身になった時のやるせなさは，それまで戦後の男女平等，男女同権思想に洗脳され，新学制下に男子共学の学生時代を送って来ただけに，耐え難いほど大きかった．他の人達はそれをどのようにして消散させたのだろう．どんな不平不満も時がそれを和らげ，やがてはそれに慣れ，そのうちに仕事の方も差がつけられ，給料がこんなに違っても仕方がないとあきらめるようになり，どうせ一生仕事するでもなしなどと仕事よりも勤務外のおけいこ事に励むようになる．使用者側にとっては入社初期の社員の給与は赤字覚悟の投資であって，すぐやめてしまうであろう女子に，たいていは停年まで勤めるであろう男子と同じ投資をしたくないと云うもっともな理由がある．私達の年代は特にひどかった時代で，戦後新学制の教育を受けた女子の第一陣を採用し，二～三年でやめられてこりごりした時，しかも不況の時とあって，どんな差別を受けても採用されれば仕合わせと云う状態だった．

女子学生亡国論のささやきが聞かれるほど女子の大学卒が増加した今日，或る程度定着化された職場が出来，比較的妥当な評価も出来て，それほど不合理な差別待遇は無くなったようである．

現在のような待遇上は男女差の全く無い職場にいると，女の子はやっぱり駄目だと評価されたくないと云う先駆者的な気持を，たいていの人は自然に身につけて来るようだ．そして二～三年たったら結婚してやめるなどと，頭初から仕事に打ちこむ気なぞ全く無いことを公言してはばからぬ一群の人達を内心悲しく思うのである．むしろ男女差をつけておいてもらう方が気が楽になるとさえ思いたくなる．

☆　☆　☆

私達の所に四年ほど前に入って二年ほどでやめた美人のMさんは，しとやかで，すなおで，いわゆる女らしい，男性が憧れてやまぬタイプの女性だった．研究室内の清掃はもちろん，いつも絶やさぬように花を活け，昼には炊飯器で皆の分のご飯を炊き，後始末をし，他の研究室から大いにうらやましがられていた．何に対してもすなおだから教えられることの飲みこみも早いと，あらゆることに評判がよかった．そしてお見合いをして結婚することになりやめた．Mさんは家庭的でいいなあとすべての男性が目を細めた．

三年ほど前に入り一年半ほどでやめたHさんは，明るいさっぱりした女性で，新入間もなくから，有能な研究員だと上司の批評もよかった．吸収出来ることは何でも吸収したいと云うタイプで家事より仕事の方を好みそうな感じであった．腰かけ就職が，働こうとしている女性の足をひっぱることだと充分意識していながらも，結婚する相手の勤務先が遠隔地だったのでやめてしまった．あの人はああ見えても女らしいところのある人だったと男性はほめた．

これらは一つの例に過ぎないが，人それぞれ生き方があろうし，家庭的な女らしい人を男性がほめ称えるのも無理からぬことだが，彼女達が男性の競争相手を退けて大学教育を受け，公務員試験にパスし，男性の研究員と同等の待遇を受けて試験研究機関に入って来たところに問題がある．家庭に入ることを最良の道と心得ているのなら，何のために男性をおしのけてまで大学に割り込み，研究機関へ入って来たのだろうか．自身の優秀さに自己満足するためか，ただ学生生活を楽しむためか．どうも女子学生亡国論支持者のような意見だが，私自身他人を批判することは出来ない．と云うのは私自身，家庭と仕事を完全に両立させるのは不可能なことと考え，家庭を持ったために仕事の能率が落ち，どちらも中途半端ですますことには耐えられそうもないと思うからである．その時家庭の方を選べば，結果としては，何のために大学を——と云われることになるだろう．

女子学生亡国論と云うもの，まともに聞き，考えたことは無いままに，何とか反撥してみたいと思う．長い目で見れば，次の世代の子女の教育に成果が上るであろうとか，女子のレベルの向上がひいては国民全体のレベルの向上につながるのであるとか，（社会への貢献度）の（大学教育を受けた者の数）に対する比を男女別々にとってみれば，まだ何と云っても数が少なくいささかエリート的であるから，女子の方が高いのではないかとか．最近，朝日ジャーナルの「大学・わたしはこう考える」と云うテーマでの募集論文の中の佳作の一編に「女子学生論——とくに教育成果の社会的還元について」と題する婦人の論文が見られた．題名だけで中身を知らないのが残念であるが．その他の女性，特に女子学生の応募論文は一般に学生生活への情緒的接近が目立ち，特に恋愛記録が多くて女子学生無用論者を勇気づけるようなものだったと云うことである．

☆　☆　☆

Kさんと私が阪大の工学部へ入学した最初の女子学生だった．それからも一年か二年おきに一人入った，二人入ったと云う程度で，理学部，薬学部，文化系の学部などに較べ，新しく出来た基礎工学部と共に今でも少ないようだ．先にも述べたように，何となく入った所がこんな状態でひどく心細く，一方では正直云って大変な自意識過剰に陥らざるを得なかった．専門課程では，Kさんは醱酵科に私は応用化学科に進んだから全くの一人ぼっちになったが，最初から一人だったら他の学部へ移っていたかもしれない．彼女はその後ドクターコースへ進み，アメリカへも留学し，頼もしい友人の一人である．

旧制の女学校も経験しているので，女子ばかりの，男女半々の，男子ばかりの学生生活みな経験することが出来た．それぞれ年令が異なる時であったから比較して云うのはまずいかもしれないが，やはり男女半々の状態が一番自然でよかったと思う．

男子ばかりの大学時代は，稀少価値を持っていて得だとよく云われた．せっかく持っている価値を利用しなくちゃ損だとも云われたが利用するすべを知らなかった．今でも多少そんな価値があるかもしれないが利用したいとは思わない．得であったか損であったかは現在に至ってもわからない．些細な事柄では代返がきかなかったこと，また出欠をとられない授業でもいるかいないかが目で知られたことなど損だった．逆に先生方によく覚えてもらえて卒業後でも何年卒の誰それと自己紹介し，それでもどんな学生だったかぴんと思い出していただけないと云うことが無く，これは得なことだろう．

一部門の学会などの発表で，女性の演者は一人ないしは数えられるほどの少数であることが多く，仕事の内容そのものよりも〝女の人〟と云うことで覚えられている方が多い．京大へ客演教授に来ておられた，水素移動重合の研究で私共の分野では知られているケネディ博士に呼ばれてお会いした時，私が〝レディ〟であったのでびっくりした云われた．仕事の優秀さで印象を与えるならうれしさこの上も無いが，そう云うことで目立つのは仕事が平凡であると大変損だと思う．しかし世は宣伝時代，もちろん仕事そのもので目立つよう努力したいが，これ

も得なこととして受け取っておくことにしよう．

それにしても，何故外国語では女性の方だけを呼称で未婚か既婚か明示しなくてはならないのだろうか．これは，女性にとっては結婚しているか否かが重要な社会的意味を持つのに，男性にとってはそのことがさしたる意味を持たないと云うところから来ているのだろうか．外国へ純然たる仕事の上だけの用で文書を書く際にも，自分の名の前に Miss とつける時，大げさに云えば，プライヴァシーを侵害されるような気がしていつも妙な気持がするのである．

☆　☆　☆

「われわれは知らず知らず，独身者を社会から締め出そうとしている．ほんとうにそうなったら，さぞかし未来はあじけなく，つまらないものになってしまうだろう．義務教育並みに結婚が義務づけられたりしたら，才能も世の中に貢献する業績も，例の独身の男女だけに備わっている奇行の数々の妙味も，すべて自然消滅となってしまうだろうから」．「歴史はその大部分が男女を問わず独身を通した人，また配偶者に対してあまり関心を払わなかった人達によって造られている．たとえば……」．「ある大学の教授陣が，かって人間の知識の進歩に最も多く貢献した十人の名を上げたことがあったが，そのなかのプラトン，ニュートン，レオナルド・ダ・ビンチの三人は一生結婚しなかったし，ソクラテスの結婚はうまくゆかなかった．アリストテレスとダーウィンは相当の仕事をしてしまってから結婚した．ガリレオ，シエークスピア，パスツール，アインシュタインは家庭にあまりわずらわされなかったようだ」．「結婚するしないは個人の自由であり，人によっては結婚に費すエネルギーを学問，芸術，探検，政活，社会事業などに使う方が，はるかに生産的であると説明しても今の学生は理解してくれない」，「義務化し，普遍化し，標準化した結婚が人生唯一の道だとすることによって，若い人達は自分自身の価値を単に結婚の資格如何，適応性如何にしぼって判断する結果となってしまっている」．

ここに長々と引用した文はリーダーズ・ダイジェストに出ていた翻訳文から抜き出した幾つかの節である．

私は独身で，すでにオールド・ミスと呼ばれてもしかるべき年令に達している．別に結婚しないことに決めているわけでもなし，自分の仕事が結婚を放棄してまでするほど価値のあるものだと気負っているわけでもない．ただ，法律的に結婚するだけが唯一の幸福な人生だとは考えていないし，化学徒の端くれに過ぎないけれどもその仕事を育児など家庭の雑事の片手間に出来るものと考えることが出来ない．現状の社会体制では，結婚が人生岐路の一大問題となる女性と違って，それが一つの小さな事件に過ぎないと云われる男性にとってすら，仕事に向けるエネルギーのかなりの部分をさかれるものであろう．もちろん両方とも立派に果した．或るいは果している非凡な女性もある．しかし，われわれ平凡な女性研究員にとっては必らず一度は見舞われる二者択一の問題である．

そこで仕事と家庭の両方をとろうとすると，男性に較べて著しく仕事の能率が落ちることになり，それでも一人前に取り扱わねばならぬことから，女は家庭に帰れと云われることになる．また，そこであっさり仕事の方を捨てると女子学生不用論を招くことになる．さらにまた，結婚もせずに仕事をしている者は，それに見合うだけの熱意を仕事に向けなければ恥ずかしいと自覚することを強いられるだろう．これは何も研究員だけに限られないが，女性の宿命のようなものだと思う．

どの立場をとるにしても，研究員となる教育を男と同等に受けて来たからには同様に厳しい，むしろ，必らずしも女性が加わらなければならなくてもよい所へ，後から〝割りこんだ〟故に，より一層の厳しい評価を受けることを覚悟しなくてはならないだろう．